

News Letter No.28

19年7月30日(月) 発信

Sato Project

農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤研究室 (大島)

〒603-8037 北区上賀茂本山 457-4

TEL:075-707-2384 FAX:075-707-2508



祇園祭の鉾や山のミニチュア

海をこえたウコン(*Curcuma domestica* Val.)

印東道子 (国立民族学博物館)

海をこえたウコン(*Curcuma domestica* Val.)

印東道子 (国立民族学博物館)

オセアニアでは、根栽類が生業植物の重要な構成要素を担ってきたが、他にも文化的に重要な役割を担ってきた植物がいくつかある。樹皮布 (タパ) を作るカジノキ (*Broussonetia papyrifera*) や、釣り糸にするオオハマボウ (*Hibiscus tiliaceus*) などは、その繊維質の樹皮が利用されることで知られる。そのほか、染料になるウコン (*Curcuma* sp.) も見落とせない。

ウコンはインド原産のショウガ科多年草で、インドから東南アジアを中心として熱帯や亜熱帯で広く栽培されている (堀田他 2002)。日本では生薬としての利用が最近さかんに宣伝されているが、根茎に含まれるクルクミンは黄色い染料の原料としても広く用いられてきた。赤ん坊の産着を染めたり、茶道具を包む布を染めたりするのはその一例である。もちろんカレーが黄色いのもウコン (ターメリック) を入れるからである。

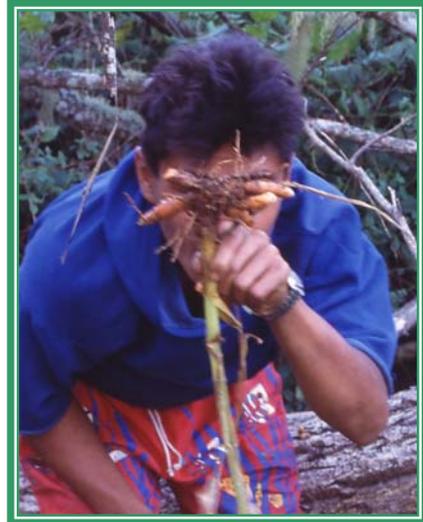


写真1 クック諸島マンガイア島のウコン



植物分類の歴史において、ウコンはしばしば *Curcuma longa* と呼ばれてきた。しかし、*C. longa* Linnaeus は異なる植物を対象に記載されており、*C. longa* Koenig が正しい。しかし、これでは紛らわしいため、1918 に Valetton が *C. domestica* Valetton と呼ぶことを提唱した (Purseglove 1987: 534)。

写真2 土管の中で栽培されたウコン
(ミクロネシア・フェイス島)

ウコンは種子を結ばないにもかかわらず、東ポリネシアにまで分布している (Whistler 1991)。狭いカヌーに入れて人間が持ち運んだ結果であり、文化的価値のある植物だったことを示している。事実、オセアニアの伝統社会において、ウコンは非常に貴重な存在であった。

もっとも広く見られるウコンの用途は染料である。布や樹皮布の色つけにも使われるが、特に儀礼時における身体彩色用として重要であった。ココナツオイルとともに手になすりつけたウコンは、生まれたばかりの乳児や産婦、初潮を迎えた少女、儀礼時の踊り手、死者などの身体にすり込まれるように塗布される。これらは人生儀礼をはじめとする重要な儀礼にかかわるものばかりである (Intoh 2005)。

これほど文化的価値の高いウコンであるが、オセアニアに多く散在するサンゴ島では、土壌が貧弱でウコンはよく育たない。そのため、近隣の火山島と行う交易の中でウコンを入手する。もちろん植物としてではなく、染料に加工されたウコンが交易用に用いられる。一本のウコンからはごく少量の染料しかできないため、火山島でもウコンの価値は高い。それを入手するためには、多くの交換財が必要とされるが、それをもちとわないくらいウコンの価値は高かった (Alkire 1978 ; 石森 1985)。

ミクロネシアのヤップ島では、ウコンの根茎をすり下ろして水と混ぜ、漉して沈殿させる。それをタケやココナツの殻製の型押し容器に入れ、火の上にするして乾燥させてウコン染料 (*ren*) をつくる。乾燥させる容器の大きさによってその価値が決まる。長さ 60 センチほどのタケ筒入りウコンは、直径 50 センチぐらいの石貨と同じぐらいの価値を持つし、特大の球状のココナツ殻で作ったものは (*ren bulak*)、小型のブタ 2 頭と等価値を持っていた (Damm 1938; 染木 1945)。

他方、チュークで作られるウコン染料は *teik* と呼ばれ、ヤップ産のウコンよりも高く評価されていた (Alkire 1978)。また、*teik* にも様々なグレードがあり、新鮮さやサイズ、そしてどんな型で固められたか (楕円形、円錐形、球形) が、その判断基準となった (Krämer 1932: 120-1)。

このようなウコンの利用はどれくらい古くさかのぼるのだろうか。多くの島で重要な人生儀礼に際して利用されていた事実を考えると、オセアニアへの拡散初期にはすでにウコンを利用していたと推察できる。ウコンのオセアニアにおける古さは、言語研究からも指摘され、オセアニアへ拡散した初期オーストロネシア語集団が話した言葉、オセアニア祖語に含まれていたことが明らかに

されている (Kikusawa and Reid 2007)。3300 年前ごろにオセアニアへ拡散してきたラピタ土器を作る集団も、ウコンを携えてきたのだろう (Intoh 2005)。

日本で赤ん坊に着せる産着にウコン色のものを使う風習は、日本の産育習俗を集めた『日本産育習俗集成』(恩賜財団母子愛育会 1975) に散見される。ウコンが防虫殺菌効果をもつためとも考えられるが、私は、赤ん坊の肌にウコンをすり込む習俗がウコンで染めた産着を着せる習俗に転化した名残ではないか、とひそかに思っている。

ちなみに、国立民族学博物館所蔵の資料にはチュークの *teik* がある (標本番号 K878)。これは高さ 8.3cm、底部径 5.3cm の円錐形で、周囲はハイビスカスの繊維で丁寧に覆われ、頂点で縛られた部分をもって持ち上げることができる。大正 4 年にチューク Tol 島で森小辨が入手し、東大人類学教室に献じたものである。



写真 3 チューク産の *teik* (ウコン染料)
(国立民族学博物館蔵)

実物は、7月26日から来年3月4日まで開催される予定の国立民族学博物館企画展「世界を集める — 研究者の選んだみんなくコレクション」のオセアニアコーナーに展示されるので、この貴重な一点をお見逃しなく！

Alkire, W.H.

1978 *Coral Islanders*. Illinois: AHM Publishing.

Dumm, H.

1938 *Zentralkarolinen*. Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910, II: B-10,2. Hamburg: Friederichsen, de Gruyter & Co.

堀田満他 (編)

2002 『世界有用植物事典 (オンデマンド版)』東京: 平凡社

Intoh, M.

- 2005 Cultural significance of turmeric (*Curcuma domestica* Val.) in the traditional society of Micronesia. Paper presented at the Oceanic Explorations Conference, Nukualofa, Tonga (August 1-7, 2005).

石森秀三

- 1985 『危機のコスモロジー：ミクロネシアの神々と人間』東京：福武書店

Kikusawa, R. and L.A. Reid

- 2007 Proto who utilised turmeric, and how? *In*, Siegel, J., J. Lynch and D. Eades (eds.), *Language Description, History and Development: Linguistic Indulgence in Memory of Terry Crowley*, Creole Language Library, 30, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. pp. 341-354.

Krämer, A.

- 1932 *Truk*. Ergebnisse der Südsee-Expeditions 1900-1910, II B, 5. Hamburg: Friederichsen, de Gruyter & Co.

恩賜財団母子愛育会（編）

- 1975 『日本産育習俗資料集成』東京：第一法規出版

Purseglove, J.W., Et Al.

- 1987 *Spices*. Tropical Agriculture Series, Essex, England: Longman Scientific and Technical.

染木 煦

- 1945 『ミクロネシアの風土と民具』東京：彰考書院

Whistler, W.A.

- 1991 Polynesian plant introductions. *In*, Cox, P.A. and S.A. Banack (eds.), *Islands, Plants, and Polynesians: an Introduction to Polynesian ethnobotany*, Oregon: Dioscorides Press. pp. 41-66.